

⑧佐倉城

■春日局の養子、正俊

春日局（1579-1643）の結婚は、いとこの婿、稲葉正成の後妻となることだった。

いとこが、幼い男の子、正次と女の子、まんを残して亡くなった為だ。

8歳も年上の夫と二人の幼子の元に嫁ぐのは、うれしくもあり悲しくもあった。

だが、子たちと、すぐに親しくなり、姉のような存在から母にになっていく。

特に、女の子、まんとは、実の母娘のようになった。

そして、夫、正成（1571-1628）の意向で、同僚、堀田正吉（1571-1629）と結婚させる。

まんには、父親と同じ年の夫だ。

親子ほどの年の差婿に、春日局は可哀そうでならなかったが、まんは、気にすることなく仲睦まじかった。

二人の間に、嫡男、堀田正盛（1609-1651）以下6人の子宝に恵まれる。

春日局は、まんの子たちを、自分の子のように可愛がった。

特に、堀田正盛には庇護者となり、きめ細かく教え見守った。

そして、家光の小姓にし、側近く仕えさせる。

次いで、老中・後には大老として幕政を率いる譜代の重鎮、酒井家の若狭國小浜藩主、忠勝の娘、あぐり姫との結婚を決める。

堀田家は譜代の重臣となった。

そして、二人の間に、正信、脇坂安政、正俊、正英、南部勝直と5人の男子が生まれた。

1634年生まれた正盛の三男が、堀田正俊だった。

春日局が、三男であり、嫡男も元気に育っていたので、養子にしたいと正盛に話す。

正盛も大喜びで了解し、翌年、養子とし、貰い受ける。

春日局は、独自に家光より三千石を得ており、この三千石を引き継ぐ旗本家を興さそうと考えたのだ。

春日局の子の稲葉家・娘婿の堀田家とはまったく別になる旗本家だと考え、本家を脅かすことなど考えもしなかった。

この頃、春日局は、家光の後継作りに画策し、成功し、悲願が成就する予感で浮かれていた。生まれ来る次期将軍の小姓に、我が手で育てた正俊を付けたいと考えたのだ。今まで、側室を持つことを嫌がった家光が、春日局の悲壮な進言に折れて、1635年、春日の局の親族の娘、お振の方を側室に迎えたのだ。まだ子は授かっていないが、春日局の願ったように、仲睦まじく男女の仲になっている。いずれは男子が授かるはずだと、自信があった。

お振の方は1637年、家光の初めての子、千代姫を生む。男子ではなくがっかりした春日の局だが、次ぎは、必ず嫡男が生まれると祝福した。まだ三歳だが、正俊の賢さが際立ってきており、将来の将軍小姓に相応しいと心弾んだ。

次々、家光に女人を仕えさせたが、なかなか子が生まれずやきもきしたが、1641年、ようやく家綱が生まれた。ほっとして、泣き笑いの春日局だったが、家光との約束通り、正俊を小姓にする。

二年後、正俊が九歳で、春日局はすべきことを終えたように亡くなる。直前、春日の局は、家光の命令として直系の孫、稲葉正則の娘と正俊の結婚を決めた。ここで、正俊は、春日局の正当な血筋を受け継ぐ。養子として最適な形式を整えた。正俊は、春日の局の遺領三千石を得て、旗本となる。

その後、1651年、家光が亡くなり、父、正盛が殉死する。父、正盛は、下総国佐倉藩（千葉県佐倉市）11万石藩主にまでなり、亡くなった。正盛が家督を継いだ時の堀田家は、旗本1000石だった。正俊は、父の遺言で、遺領のうち下野国新田一万石を得る。17歳で1万3千石の大名となる。

将軍となった家綱に変わらず仕え、信任され1660年、奏者番となり、上野国^{あんなか}安中藩（群馬県安中市）2万石を得る。義父、稲葉正則（1623-1696）の歩んだ道を少し遅れて歩いた。まるで、稲葉家嫡流のような歩みだった。

すると、嫡流の兄、正信に事件が起き、1660年、堀田本家は改易されてしまう。

正俊は、一途に家綱に仕え、類は及ばなかった。

1670年、若年寄となり、1679年、老中となり2万石加増され^{あんなか}安中藩4万石藩主となる。すべて順調すぎるほどだった。

父、正盛が得た佐倉藩にはまだ、及ばないが、嫡流は改易され、堀田本家は正俊だ、と誰もが思うようになっていく。

1680年、家綱は後継を残さないまま亡くなる。

その後継をめぐり、権勢を誇った大老、酒井忠清に対抗して、正俊は家綱の異母弟、綱吉を次期将軍に推した。正俊は勝利し、将軍、綱吉が誕生する。

正俊は、義父、稲葉正勝(1597-1634)の若死にや堀田本家の改易に大きく関与したのは、権力の集中を狙う松平信綱(1596-1662)だと憎んでいた。

また、権力を集中を実現した酒井忠清(1624-1681)にも相いれない思いがあった。

突出する者だけが取り仕切る幕政ではなく、将軍と幕閣が合い携えて幕政を行うべきだとの考えを持っており、この機会に思いを遂げた。

綱吉は、将軍に決まると、即座に、大老、酒井忠清を罷免し、江戸城、大手門前の忠清邸を引き払わせる。

そして、正俊に与え、続いて、1681年、忠清に代わって正俊が大老となる。

結局、正俊は忠清に取って代わっただけだった。

綱吉は、将軍となったのは正俊の功だと持ち上げた。

正俊は、権勢並ぶべき者はないと言われるほどの幕閣の中心に位置し思うがままに幕政を率いる。

綱吉将軍を擁して、牧野成貞とともに「天和の治」と呼ばれる政治を執り行ない、特に財政面に大きな成果を上げる。

ここで、正俊は、古河藩13万石を得る。

正俊は、家綱・綱吉に仕え、大老まで上り詰め、堀田家分家でありながら春日局の養子として本家以上の存在感を持つ。

嫡流本家は、家名の再興は果たしたが、1万石になってしまった。

だが、正俊の栄華も短く、1684年、親戚の若年寄の美濃青野藩主、稲葉正休まさやす（1640-1684）に、江戸城内で刺殺された。50歳だった。

正休まさやすもその場で殺害され、真相は闇に包まれた。

稲葉正休まさやすは春日局と離婚した稲葉正成と後妻、山内康豊（土佐高知藩主、忠義の父）の娘との間に生まれた子、稲葉正吉（1618-1656）の嫡男だ。

正吉は、10歳で父、稲葉正成の長子、正次（1591-1628）の養子となり後を継ぎ、5千石旗本となっていた。

長子、正次から末っ子、稲葉正吉そして稲葉正休まさやすと続いたが、皆それぞれ腹に一物を持っていた。

稲葉正成家の本家を継ぐはずだったとの思いが根底にあり、旗本五千石では満足できなかったのだ。

特に、正休まさやすは、叔父、忠義は高知藩主だとの思いがあり、出世したかった。

だが、なすすべもなく、家老、安藤甚五右衛門・側近、松永喜内らと欲求不満を解消するしかない日々を過ごしていた。

そして、正吉の愛に不誠実な恐ろしさを感じた家老、安藤甚五右衛門が松永喜内と共に、駿府城護衛の役目を果たしていた1656年、正吉を殺した。

正吉から寵愛された二人だったが、正吉の愛はその場しのぎで実がなかった。

やむなく、嫡男、稲葉正休まさやす一六歳が後を継ぐ。

春日局の嫡流、稲葉家当主、正則は、いどこ、正吉の屈折した思いを理解していた。

そこで、身を引く覚悟だった正則は、稲葉正休まさやすを将軍近くで仕えられるよう推した。

将軍、綱吉は、反綱吉派とみなした稲葉正則を嫌い、身を引くよう言っており、正則の薦める正則嫡男、稲葉正住（1640-1716）と稲葉正休まさやすを喜んで召抱える。

だが、綱吉は、正則を感じさせる嫡男、正住まさみちを気に入らず、正休まさやすが気に入り側近く置いた。

正住まさみちも、稲葉本家の正休まさやすが将軍綱吉側近となることは、稲葉家にも良いことと応援した。

こうして、^{まさやす}正休は、綱吉近習となり、1682年、若年寄となり、加増されて青野藩一万二千石を得た。

能力を認めてくれる主君、綱吉にめぐり合えた喜びと、役に立ちたいとの忠誠心に燃えた。そして、綱吉が、堀田正俊に不満を持っている思いを理解し、共有していく。

堀田正俊は、義弟、^{まさみち}正住を評価し、^{まさやす}稲葉正休に厳しく接した。

^{まさやす}稲葉正休は、正俊を春日局の威光をかざし堀田本家を乗っ取った許せない人物だと思ふ。

直接の対立は、大坂の淀川の治水事業に関する意見対立だった。

だが将軍、綱吉は「生類憐れみの令」の施行を表明したが、正俊は反対し激しく怒っていた。

綱吉は、庇護者を気取り命令に従わない堀田正俊を排除する機会を探していた。

1684年、^{まさやす}正休は、綱吉の意向に沿い正俊を殺した。

だが、綱吉から恩賞を得るはずが^{まさやす}正休もその場で殺され青野藩一万二千石は改易だ。

代わりに、父、稲葉正次が亡くなった時、幼くて家督を継げなかった^{まさよし}正能（1654-1725）が別家を立て、旗本となる。

正俊は被害者であると認められ、嫡男、堀田正仲（1662-1694）への家督相続が許されるが、最高の場所にあった江戸上屋敷を明け渡すよう命じられ、かつての勢いはなくなる。その上、1685年、佐倉藩から出羽山形藩へそして陸奥福島藩へと国替えだ。

この事件以降、綱吉は、幕閣を気にせず、奥御殿で政務をとるようになり老中と距離を置く。。こうして、思いのままに幕政を執り始める。

そこで、綱吉の意向を老中に取り次ぐ柳沢吉保・牧野成貞ら側用人が力を持っていく。

堀田家は、佐倉藩に戻る日の為に、歴代の藩主は幕閣の中枢に入るべく努力する。

ようやく、61年後、堀田^{まさよし}正亮が当主になり、老中として実績を積み上げ、1746年、佐倉藩に返り咲く。

次いで老中首座にまで登り、11万石となり、過去の栄光を取り戻した。

実質、春日局から始まった堀田家は、紆余曲折があり、ややこしいが、佐倉藩主として定着し、幕末まで続く。